

福岡について

——「喪」をとらえなおす——

後山剛毅

はじめて原爆文学研究会に参加して三年が経つ。はじめての参加は、二〇一八年一月二二・二三日に開催された第五七回研究会だった。思えば、もう半年早く参加する予定だったが、七月二八・二九日の研究会は、初日に扁桃腺が腫れて欠席し、二日目は関西地方に台風が直撃し中止となった。初参加以来、予定が会うかぎり、定期的に参加してきた。僕が参加するようになって、たまたまなのだろうが、例年一二月の研究会は福岡市で開催されている。

一年に一度、福岡を訪れることが楽しみになりつつあった。福岡までの小旅行のお土産として博多の料亭稚加榮の明太子を購入する。京都に戻って、それを日本酒のアテに誕生日、大晦日、元旦と味わうのが習慣になりつつあった。それが昨年来のコロナ騒動でパーになった。人間、年に一回決まった土地を訪れるのも容易ではないらしい。生活の一部になろうとしていた習慣がコロナになって難しくなった。

さて、コロナ禍のなかで、人間の大量死と喪の問題が注目を集め

ている。二〇一九年、所属研究紀要に投稿した論文「原民喜作品における原爆の記憶——二つの「死」に注目して」が、二〇二〇年のコロナ禍に入って刊行された。原民喜（一九〇五～一九五二）の二つの作品群——「美しき死の岸に」と「原爆以後」に注目して、それぞれの「死」の描写の違いから、原爆以後に人を追悼する——「喪」の問題を再考する試みだった。東京の友人が、シヨルジョ・アガンベン（一九四二～）の「死者の権利」の議論に絡めて、原民喜の作品が「個別」の「喪」に服す「生者」の権利にも関係するという好意的な感想を寄せてくれた^①。コロナ禍の大量死のなかで、個別の誰かの「喪」に服するということについて考えるきっかけとなった。このテーマが先鋭化したのが、二〇二〇年一〇月二三日の父の死だ。批評家の東琢磨（一九六四～）に誘われて執筆した渡哲也（一九四一～二〇二〇）の追悼原稿の校正を終えた二日後のことだった^②。渡論では、『愛と死の記録』（一九六六）における渡の表情の演技に「瞬間的な死」の硬直を見いだし、その話を原民喜の「火

の子供」における「瞬間的な死」が人の日常のなかに潜んでいるという話に絡めて論じた。そして、その「瞬間的な死」の演技が『時雨の記』（一九九八）の狭心症に苦しむ壬生孝之助にも見てとれると繋げた。そして、壬生は心筋梗塞で亡くなった。

コロナ禍において、突如として急性心筋梗塞で亡くなった父を、渡の演じた壬生に重ねずにはいられない。そして、原爆という大量死のまえに、最愛の妻の「美しい死」を看取った原民喜のことを想起せずにはいられない。二〇一九年の論文執筆時には、いかにして原が「原爆死」と「美しい死」のあいだを架橋して思考しようとしたのかということに関心があった。しかしながら、コロナ禍の父の死を経て、二つの「死」のあいだにある距離をとらえなおすことに関心が移りつつある。

やはり大量死と個別の死の関係を原民喜の作品を通して再考しなければならない。そのことがこの一年あまりで先鋭化された。コロナになつて不可能になつた福岡旅行。福岡という土地に惹かれてやまないのは、父が一年に一度競馬のために必ず訪れていたからかもしれない。

注

- 1 アガンベンによるコロナについての論稿は次のものを参照した。ジョルジュ・アガンベン「説明」（高桑和巳訳、『現代思想』第四八巻第七号、青土社、二〇二〇年、二〇―二二頁）

- 2 渡哲也の追悼原稿は以下のもの。後山剛毅「渡哲也の記憶——広島と呉から」（『文藝別冊 渡哲也 昭和の映画俳優「仁義」の栄光』

河出書房新社、二〇二〇年、一七六―一八三頁）